都道府県別賞一等

当たり前が当たり前であるために

福岡県　東福岡自彊館中学校　一学年

松之迫　凱仁

二年前、母がガンと診断された。僕は頭の中が真っ白になった。母は「早期発見だから大丈夫だよ。」と笑顔で言った。でも、その声は少し震えていた。その声を聞いて、僕の中に『大丈夫。』と信じたい気持ちと、『本当に大丈夫なのだろうか。』という不安な気持ちが入り混じった。いや、実際は不安な気持ちの方が圧倒的に大きかった。

母は普段から食事や健康にとても気を遣っていたし、毎年受けている人間ドックでも悪いところは全くなかった。そんな母がガンになるなんて、信じられなかった。これまで当たり前だと思っていた毎日が、突然変わってしまったように感じた。

当時僕は小学五年生だった。ちょうどその頃、どうしても行きたい学校があり、私立中学校を受験すると決めたばかりだった。本当なら、自分の夢に向かって頑張る時期だった。でも、母のことが心配で、『受験を続けてもいいのかな。』『家族に負担をかけてしまうのではないか。』と考えるようになった。母の病気のことだけでなく、自分がこれまで通りの生活を続けられるのか、いろいろな不安が重なり、勉強に集中できない日もあった。

そんな中で、もう一つ心配だったのが母の治療にかかるお金のことだった。幸い母が加入していた生命保険には、ガンと診断されたときに受け取れる一時金があり、そのおかげでお金の心配は思っていたほど大きくならず、家族みんなが母を支えることに気持ちを向けることができた。僕も安心して受験勉強を続け、第一志望の中学校へ進学することができた。

一方で、母から聞いて初めて知ったこともあった。母は、公的な医療制度が充実しているし、貯金をしておけば大丈夫だろうと考え、医療保険には加入していなかったそうだ。実際、手術や入院にかかった費用の自己負担は、思っていたより少なく済んだという。でも、ガンは手術が終わればすべて終わりではない。母は今も、再発や転移がないか確認するため定期的に検査を受けている。一度、転移の可能性があると言われ、精密検査を受けたこともあった。結果が分かるまでの数日間、家族みんなが落ち着かず、『何もありませんように。』と願うことしかできなかった。幸い、今のところ大きな異常はないが、要観察となっている。

母はこれからも病気と向き合っていかなければならないし、家族の不安も

続いていくのだと思う。母は「こんなことなら元気なうちに医療保険にも入っておけばよかった。」と言っていた。大きな病気になると、保険に入りたくても制限があり、入れないこともあるそうだ。

これまでの僕は、「保険」という言葉は知っていたけれど、どんな役割があるのかはよく知らなかった。大人になったらなんとなく入るもの、というくらいにしか考えていなかった。でも、母の病気を経験して、保険はなんとなく入るものでも、必要になってから考えるものでもなく、元気なうちに自分や家族のことを考えて備えておくものなのだと知った。

今、僕が友達と笑いながら学校生活を送り、サッカー部にも所属して大好きなことを続けられているということは決して当たり前ではない。家族みんなの支えがあって、今の生活があるのだと思う。

母がガンにならなければ、僕は今の毎日がどれだけ特別で大切なものなのか、気づかないままだったかもしれない。昨日まで当たり前だった日常が、ある日突然変わってしまうことがある。だからこそ、今こうして家族や友達と笑って過ごせる時間を大切にしたい。そして、もし将来僕が家族をもつことがあれば、大切な人が安心して毎日を過ごせるように、元気なうちからよく考えて備えられる大人になりたい。